

芸術スポーツにおける技と表現のジレンマ

A Dilemma between Competing and Performing

1K05A054

指導教員

主査 加藤清忠先生

甲斐 久美子

副査 杉山千鶴先生

1. 緒言

スポーツには様々な競技の仕方がある。に直接相手と対戦し勝敗を決めるものや、着順や所要時間(タイム)を競うもの、距離を競うもの、また、的を射るものなどがある。これらの競技は試合における優劣が一目りょうぜんであり、その判断が簡単である。しかし、スポーツと呼ばれるものなかには、技術と芸術性に点数をつけ、優劣を競うものがある。オリンピックの公式種目としても採用されているシンクロナイズドスイミング、新体操、フィギュアスケート、またオリンピックの正式種目入りを目指している競技ダンス(社交ダンス)、近年国際大会やコンクールなどが頻繁に開催されているチアリーディングやバレエ、ストリートダンス、バトントワリング、エアロビクスなどがその一例である。そこで、競技として表現をすることが盛んになっている今日、それらの競技をもっと深く探ることにより、その競技の本質を知る手がかりとしたいと考えた。

2. 方法

この研究の対象となる競技は、オリンピックの公式種目として採用されているシンクロナイズドスイミング、フィギュアスケート、新体操、そしてオリンピックの正式種目入りを目指している競技ダンス、またその他の競技として、チアリーディング・チアダンス、バレエ、ストリートダンス、バトントワリング、エアロビクスの合計9競技である。競技についての調査は、文献を通して行う。文献は、書籍から新聞記事、インターネットのサイトと幅広く使用する。調査項目としては、まず競技化の歴史を知るところから始めたい。どのような起源と発展の歴史の

なかで、どのようにして競技化することになったのかについて明確にする。次に競技方法について調査する。競技をするときにどのような点が重視されるのか、また表現という曖昧で非常に客観視の難しい要素をどのように採点するのかを明らかにしたい。最後に、競技化されていくスポーツの行く末について考えてみたいと思う。

3. 結果

どの競技も独自の競技化への道を辿ったが、競技方法に関しては共通するところが多々ある。

まず、競技として成立させるために基礎的な技が存在する。多くの場合、選手は規定演技と自由演技の2種目を実施し、それぞれ比重は異なるが、【技術点+芸術点】で評価をされる。審査項目を細分化することにより採点の客観性を保とうとしているのである。ちなみに、個人あるいは少人数競技では技術が、団体競技では芸術性が特に重視される傾向も各競技でみられた。また採点の公平・公正を保つために、最高点と最低点を除外した点数のみを使用するという点も共通している。しかし、細かな審査項目を設定せずに、他の競技者との相対的評価で採点をする場合もあった。この場合は、どのような表現をしているかというのが、特に重要視される。

4. 考察

いずれの競技も芸術的要素を取り入れることで、競技としての幅が増え、競技としてさらに発展してきたように思う。しかし競技として注目されるようになったが故に、様々な弊害も起きていると感じる。

競技化により技が確立され、技術の練習に偏り、単に競技会で点数を稼ぐためだけに練習する選手がいるが、それでは何も中身がないと思うのだ。自分の思いや感情をそのスポーツを通して表現するという、他の競技スポーツでは備わっていない要素があるのだ。見る人が多くなればなるほど評価も厳しくなる。表現の要素を無視した演技、技だけの心がない演技では審査員や観客のこころをとらえることはできない。もっと表現することの楽しさや喜びを感じながら演技を行えたら、たとえ競技の世界であったとしても、輝くことができるのではと感じた。

5. 結論

人にはそれぞれの価値観がある。つまり目の前で繰り広げられている事象をどのように解釈するかというのは、個人の自由である。この解釈の仕

方も一定ではないだろう。時が変われば、良いと思っていたものも悪く見え、反対に悪く見えていたものが突然良く見えるかもしれない。芸術性というのは、本来ならば何かのモノサシで推し量ることなど、到底できないもので、万人が納得するような評価はできないはずである。しかし、競技スポーツには、得点の中に芸術性を加味するものがあり、盛んに競技会が行われている。しかし、競うことを否定したいわけではない。他者と競うということには、メリットもある。他人から様々な評価を受け、それが採点や順位というわかりやすい形で出てくるのも、時には悪くない。しかし、他者と競うことや他人の評価ばかり気にしていると、せっかくの演技も空虚なものとなり、台無しになってしまう。選手は、周りに左右されず、自分がなぜ表現することを選んだのか、自分の行っているスポーツの特性を考えながら、競技に取り組むべきであろう。